

学会機関誌『医学教育』*1

鈴木 淳 —*2

1. 編集委員会の構成経緯

1998（平成10）～1999（平成11）年は、前期に引き続き尾島昭次委員長、畑尾正彦・神津忠彦副委員長の2年間、そして、2000（平成12）～2001（平成13）年の2年間は、返り咲きの筆者が委員長、副委員長に学会副会長の畑尾正彦、齋藤宣彦両氏を迎えた。編集委員会の方は齋藤宣彦氏を第一副委員長との了承の下に発足した。

筆者を編集委員長に返り咲かせたのは尾島新学会長である。丁度学会長交代の時に、篠原出版が新社として再発足したことと関係がある。小生が、学会発足以来25年間編集長を務めたことから、篠原出版から篠原出版新社への移行に配慮されてのこと、結局、編集委員長をお引受けした。

前期までは、編集委員は運営委員全員が兼任し、多くの場合、査読も引き受けてきた。新編集委員会発足にあたって、諸々相談の結果、編集委員にはその道に秀でた方々の推薦を受け、相澤好治（北里大公衆衛生）、稲島 統（慈恵大医学教育研）森田孝夫（埼玉医大医学教育）の3氏に編集委員をお願いした。年6回の編集委員会は、交通の便良く、会場費なしの好意を得て、お茶ノ水駅近くの神尾記念病院の会議室で開催することにした。篠原出版新社からも歩いて10分の距離にある。

前会長堀原一、会長尾島昭次の両編集顧問、篠原出版新社井澤泰社長、編集担当元井真奈美氏はもちろん、毎回全員出席による編集委員会を開催して来た。

2年目（2001年）に入って、この人数では編

表1 投稿論文採択率（1998～2001年）

年	総投稿論文数	受理論文数	採択率
1998	43	37	86.05%
1999	44	31	70.45%
2000	50	35	72.00%
2001	32	15	67.44%

(2002年7月現在)

集作業がかなり多忙なことが分り、松岡健氏（東京医大内科）に、また、2002年4月からは、本学会ホームページ担当にも関連して、庄司進一氏（筑波大）に加わっていただいた。

査読は、編集委員が論文ごとに2名の査読者を依頼、その意見に従って編集委員会で採否を決定する。45歳以上の学会会員リスト（400名余）を学会事務センターの菅野典子氏が作成、査読を依頼している。投稿規定の変更が多少必要であった。毎号の号末にご覧いただいている通りである。2001年の査読通過率は、表1のように、やや下がっている。査読者の方々の多大のご努力に厚く御礼申し上げたい。

2. 編集・発行の仕組み

新編集委員会が発足し、2000～2001年、実働2年を経た。小生は、長らく『医学教育』誌の編集に関係して来たので、本誌の質的向上にはもちろん括目しているが、実は、今一步と思っている。会員が毎号を心待ちするような、そして大きな興味と注目の的になるような、そんな雑誌にできないであろうか。

何年前か前、論文が比較的少ない時期には、しばしば「特集」を組んだ。カリキュラム研究会を開いて、特に国外の医学教育への関心を求めた。「特集」「座談会」などを復活させたいとの案が新編集委員の間で提案されていた。第33巻から2、3実現する計画である。

*1 Journal “Medical Education (Japan)”

キーワード：編集委員会、査読、イラスト・コラム、医学教育賞、ホームページ

*2 Jun-Ichi SUZUKI 帝京大学名誉教授・『医学教育』編集委員長

表2 表紙解説 (1998~2001年)

第29巻 (1998年)	第1号	模擬患者: SP (simulated patient/standardized patient)	藤崎 和彦
	第2号	PBL (Problem-based learning)	S F
	第3号	体験と理論	徳永 力雄
	第4号	高齢者介護教育をカリキュラムの中に	橋本 信也
	第5号	チーム医療の教育	今中 孝信
	第6号	パラメディカルの医学教育	小寺 一興
第30巻 (1999年)	第1号	コミュニケーション手段としての言葉	齋藤 宣彦
	第2号	FD (Faculty Development)	田中 勲
	第3号	医学教育の国際標準化 (international standards in medical education)	細田 瑳一
	第4号	(30周年特集のため「表紙解説」なし)	
	第5号	EBM (evidence-based medicine)	尾島 昭次
	第6号	DRG/PPS と診療録管理との一体的医療教育の必要性	岩崎 榮
第31巻 (2000年)	第1号	ほめる医者, おどす医者, 無関心な医者	西園 昌久
	第2号	入学選抜	高久 史磨
	第3号	医師の3つの時期	福島 統
	第4号	コア・カリキュラム	森田 孝夫
	第5号	小集団学習	相澤 好治
	第6号	On the job training (OJT)	福島 統
第32巻 (2001年)	第1号	教育学と実践	森田 孝夫
	第2号	「かかりつけ医」教育	相澤 好治
	第3号	Structured curriculum	福島 統
	第4号	共用試験	森田 孝夫
	第5号	卒後臨床研修は労働?	相澤 好治
	第6号	インパクトファクター (I.F.) と風格による教官評価	松岡 健

表3 巻頭言 (1998~2001年)

巻	号	タイトル	執筆者
第29巻	第1号	日本は変わるのか	桜井 勇
第30巻	第1号	卒後教育の重要性	堺 隆弘
第31巻	第1号	医学教育の歩留まり	久道 茂
第32巻	第1号	国際化時代の「プロ」の育成へ!	黒川 清

牛場大蔵元会長, 昨今は堀原一前会長ほかの文献紹介, ワークショップなどのニュース, てがみ欄, アナウンスメント, 各委員会報告など, 本誌の“通報”はかなり多岐に互っている。

「イラスト・コラム」は, 第13巻(1982)より, 表紙解説は第14巻(1983)より綿々と続いている。ナギカツオ氏の, 上品な表紙絵やイラストも, 本誌の魅力を支えていると思う。

日本医学英語教育研究会が本学会から分離・独立し, 2001年からは学会になった。これは, まことに慶ばしいことであるが, 「英語教育」が本

学会にも何らかの形で存在することが望ましいと考え, 2001年の会誌から「医学英語シリーズ」を持つことにした。手始めは, 自治医大の英語研究室茂木秀昭教授の「ディベート導入」3回であった。これから著者を3~4回ずつ交代しつつ続ける計画である。英語教育を得意とされる会員の方々に門戸を開いている。本シリーズ担当の相澤好治編集委員に申し出ていただきたい。

「てがみ」欄を充実したい。習慣的に編集委員それぞれがお願いしているが, 自由な投稿を多数いただきたい。

表4 イラストコラム (1998~2001年)

第29巻	第1号	国の繁栄の元は何か?	JS生
	第2号	臨床医の教育への貢献度評価	福井 次矢
	第3号	臨床医の評価	岩崎 榮
	第4号	医学教育の外部評価に思う	尾島 昭次
	第5号	医療の質と医学教育の質—コストの圧力—	紀伊國献三
	第6号	体験効果の2方向性	西園 昌久
第30巻	第1号	教員の評価	高久 史磨
	第2号	効果的クリニカル・クラークシップの実践	植村 研一 (彦)
	第3号	医療は協導・協働	藤崎 和彦
	第4号	医学教育への市民参加	福間 誠之
	第5号	クリティカル・パス/クリニカル・パス	徳永 力雄
	第6号	態度, 人間性の教育	橋本 信也
第31巻	第1号	AO入試を考える	今中 孝信
	第2号	医療過誤と医療訴訟	相澤 好治
	第3号	患者という言葉のとらえ方	福島 統
	第4号	ソクラテス的教育法	森田 孝夫
	第5号	やっと動き出した日本の医学教育改革, その行方は?	相澤 好治
	第6号	授業中の飲食考	福島 統
第32巻	第1号	Performance goal と Learning goal	森田 孝夫
	第2号	クリニカル・クラークシップでの学生のパフォーマンス	相澤 好治
	第3号	思考力を育てる教育をするには	福島 統
	第4号	医療の時間軸	相澤 好治
	第5号	学士入学制度に思う	森田 孝夫
	第6号	患者さんに対する医学生の役割	

表5 特集一覧 (1998~2001年)

巻	号	タイトル
第29巻	第1号	日本医学教育学会名誉会員中川米造氏追悼
	第3号	医学教育制度
第30巻	第4号	日本の医学教育/改革へのあゆみ 1989~1998
	第4号	PaPaSME'99 Proceedings
第32巻	第4号	日本医学教育学会名誉会員上田篤次郎氏追悼

表6 出版物一覧 (1998年以降)

基本的臨床技能の教育法マニュアル
 編集/日本医学教育学会臨床能力教育ワーキンググループ
 発行/南山堂 2002年, 5月
 (2002年7月現在)

表7 医学教育賞受賞者 (1998~2001年)

年	賞	受賞者
1998	牛場賞	尾島 昭次
	懸田賞	庄司 進一
1999	牛場賞	西園 昌久
	懸田賞	(該当者なし)
2000	牛場賞	山下 文雄
	懸田賞	赤林 朗
2001	牛場賞	細田 瑳一
	懸田賞	村上 純子

「てがみ」や「ニュース」などに短い“コメント”が付いているのにお気づきと思う。これは編集委員の“特権”として、編集委員、編集顧問の方々がコメントしているが、てがみなどに側面からのサポートとして役立ってほしいと思う。

学会のホームページは、運営委員会の了承を得、理事筑波大の庄司進一氏・編集委員 森田孝夫氏の担当でスタートした。ここに「Q & A」があるとよいとの考えがあり、2002年には実施される予定である。会員諸氏の注目、そしてご協力を得たい。

「書評」は有難い。編集委員も努力していることご承知の通りであるが、会員諸氏の投稿も歓迎である。この場合、本誌に適切かどうか、内容についても編集委員会の通過を必要とする。著者その他への配慮も必要なので、この件、ご了承を得たいと思う。

厚生省・文部省の主催、日本医学教育学会の協力による医学教育者のためのワークショップは、富士研30年の雌伏を経て、ようやく今日、特に臨床研修指導医のためのワークショップが、多くの大学病院・教育病院などで行われるようになった。岐阜大に新設された医学教育センターは、同センター主催ワークショップのほかに、持ち込みのワークショップ歓迎のようである。医学教育センターの設立は、富士研ワークショップスタートの初期からわれわれみなさんの念願であった。このたび、文字通り日本の真中の岐阜市に設立され、同センター長の指導により活発に活動している。ご同慶に耐えない。

これに関連して、年間のワークショップ開催リ

ストが、本学会ワークショップ担当の堀内三郎氏（岩手医大）によって本誌第33巻・第1号に発表された。今回の発表は大学関係ワークショップのみとのことであるが、ぜひ教育病院を含めたりストを示していただきたいと思う。ワークショップ報告は、システム化して、開催の報告が自然に担当者に集まるよう、学会誌も協力したい。堀内氏に提案中である。

ところで、厚生・文部両省主催の富士教育研修所でのワークショップは、その役割りを果たし終えたのではないかと、との声がある。確かに臨床教育のワークショップは、多く、いろいろの形で開催されるようになったが、全国の大学と研修病院、卒前、特に教養・基礎を含めての医学教育ワークショップは見当たらないようである。医学・医療に多くの問題を抱え、医学・医療の目標も定かでない今日。特に厚生・文部両省の主催によるこの富士研ワークショップが求められていると見るが如何であろうか。

本学会誌は、2002年に33巻になった。年6号、各号64ページ、この「30年1日」の型を破りたいとの考えは、今まで再三、運営委員会にも提出された。大会号（5号）は、大会担当の裁量でページ数も増やしていること、ご承知の通りである。この際、大会号を別号として、それを含め年7号にしたいという提案もある。本学会の綿々とした地味な発展にも、そろそろ多少の型破りが許されてよいかと思う。これらの件に関して、ぜひ会員諸氏の声、アドバイスを伺いたいところである。